

# 阿弥陀経のこころ



森重 一成



探究社

●表紙デザイン：DESIGN STUDIO ギンコ(安楽寺 登世岡浩雄)

## 阿弥陀経のこころ／目次

- 一 お経きようにあうことの意味いみ・3
- 二 『仏説阿弥陀経』ぶつせつあみだきようについて・5
- 三 三蔵法師さんぞうほうし、鳩摩羅什くまらじゆう・8
- 四 『阿弥陀経』あみだきようを読む前まえに心こころしておくこと・11
- 五 祇園精舎ぎおんしょうじやでのお説法せつぽう・14
- 六 これより西方さいほう、十万億じゆうまんおくの仏土ぶつどをすぎて世界せかいあり・16
- 七 八功德水はつくとくすいそのなかに充滿みちみてり・20
- 八 青あおき色いろには青あおき光ひかりあり、白しろき色いろには白しろき光ひかりあり・23
- 九 つねに天樂てんがくをなす・26

- 十 共命ぐみょうの鳥とり（表紙ひょうし絵え）のおしえ・28
- 十一 光明こうみょう無量むりょうの阿弥陀仏あみだぶつ・31
- 十二 寿命じゆみょう無量むりょうの阿弥陀仏あみだぶつ・34
- 十三 極楽国土ごくらくこくどに衆生しゆじやう生れしものは、みなこれ阿鞞跋致あびばつちなり・37
- 十四 俱会くえい一処いつしよ・39
- 十五 もしは一日いちにちくもしは七日しちにち・41
- 十六 東方世界とうほうせかいく上方世界じやうほうせかい（六方段ろっほうだん）・44
- 十七 五濁惡世ごじよくあくせ・48
- 十八 難信なんしんの法ぼう・51

## 一 お経きようにあうことの意味いみ

なぜ、私たちはお経（仏の教え）にあわなくてはならないのでしょうか。

チンプンカンプンさっぱり意味いみがわからず、一見いっけん、私たちの人生とはなんの縁えんもないと思われがちですが、お経には生きていくべき方向ほうこうが示しめされ、豊ゆたかな人生へと導みちびいてくださる宝物たからものがつまっているのです。

聖徳太子しょうとくたいしは、仏教ぶつぎょうを我が国におとり入れになった理由わけを三つ挙あげておられます。

第一だいいちに、いのちあるものの本当の依よりどころが仏教であると説とかれていす。人は誰だれもが幸せを求めて生きています。それが健康けんこうであったり、衣食いしょく住じゆうが安定あんていしていることであつたり、家族かぞくの絆きずなであるなど人によつてさまざまです。その何なにを目標めざしていくかで、生きていく方向ほうこうや姿勢しせいが決きまってゆくよ



うです。しかし、私たちの求める幸せの殆んどが「一切が無常」の対象となるものですから、頼る相手が動いていき、怨み節で人生を終わりがねません。時や処を超えても変わることなく、しっかりと人生の支えとなるのが仏教です。

二つ目は、世界の数ある宗教の中でも極めてすぐれたみ教えが仏教だといわれています。

お釈迦さまの覺られた真理は、縁起の道理（一切はみな、あい依りあい扶けあってつながりあっている）を始めとして、深く温かい教えであり、すべてのいのちを大切にす和の宗教です。たえ間ない争乱や汚染で、生物だけでなく地球そのものの生命までが危ぶまれているいま、心ある人たちに仏教が改めて見直されています。

三つ目に、仏教は私の姿をありのままに教えてくださり、曲っている私たちをすがたのありようを直してくださる鏡だといわれています。中国の高僧

善導さまは、「経は教なり、教は鏡なり」と説かれています。立派な宗教とは、鏡の機能を持つ宗教とも言いかえることができますでしょう。

では、私たち凡夫のための『阿弥陀経』。心して拝読いたしましょう。

## 二 『仏説阿弥陀経』について

『仏説阿弥陀経』は、数多く説かれたお釈迦さまのお経（お説法）の中でも、私たちに最も親しまれているお経のひとつで、ご法事などでなん度かお耳にされたことでしょう。

最初の『仏説』とは、お釈迦さまが直接に説かれた教えということですが、一口にお経といっても、インドの菩薩がたの書かれたものは「論」といいます。お子さまが日曜学校などで読まれる「十二礼」は龍樹さまの書かれたもので「論」になります。中国や日本の僧の書かれたものは「釈」といいます。

私たちにおなじみの「歸命無量壽如来」で始まる「正信偈」は、同じお経といっても「仏説」の文字はついておりません。

お釈迦さまは相手に応じて法を説いておられるので、いわゆる「八万四千」といわれるように多くの教説が伝えられています。ただ在世中は語られたものであり、書き記されたものではありません。ご入滅された後、師のお言葉を正しく次代へ伝えるために、高弟の迦葉を中心としてお弟子がたが、お説法を一定の言葉にまとめ、みんなで称えることを申し合わせました。それがお経の始まりです。

どのお経も「私はこのように聞きました」という言葉で始まっていますが、この「私」とは阿難というお弟子です。阿難さんは秘書のような役目をし、常にお釈迦さまの説法を身近で聞いていました。記憶力抜群の阿難さんの言葉を皆でまとめあげ、忠実に口伝えされていきました。文章化されたのは、それから四、五百年の後と推定されています。



ただ「阿難」とあるのを他人ごとでなく「自分の名」に置きかえて味わい  
ましよう。

さて数あるお経（仏説一四二〇部）の中から、浄土真宗では、左記の「浄  
土三部経」を選んで、お救いの依りどころとしています。

仏説無量寿経 上下二卷（略して大経）

仏説観無量寿経（略して観経）

仏説阿弥陀経（略して小経）

この三部の中で、量的に最も少なく、しかもお浄土についての内容がよく  
まとめられていますので、ご法事などで一番よく読まれているのが「仏説阿弥  
陀経」です。

『阿弥陀経』は問いなくして、お弟子の舍利弗にお浄土について説かれて  
います。

その内容は、大別すると次のとおりです。

- ① 極楽浄土の世界（その国土のありさま）
  - ② 極楽浄土の主（阿弥陀仏）
  - ③ 念仏による救い（浄土に生まれる道）
  - ④ 六方の諸仏がたのすすめ
- 私たち凡夫を救わんがために「舍利弗よ」と三十六回も呼びかけながら、お説法されるお釈迦さまの熱き思いをしっかりと受けとめ拝読させていただきましよう。

### 三 三蔵法師 鳩摩羅什

三蔵法師といえは、人名（固有名詞）と思っっている人が多いようですが、仏教を伝えるために功のあった高僧がたへの敬称なのです。

「死の道」といわれるシルクロードを経て、インドより経典（サンスクリ